



Title	柿衛文庫所蔵の懷徳堂ゆかりの絵画：その画賛を読む
Author(s)	湯城, 吉信
Citation	中国研究集刊. 2019, 65, p. 58-68
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/76123
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

柿衛文庫所蔵の懷徳堂ゆかりの絵画

——その画賛を読む

湯城吉信

はじめに

現在、伊丹市にある柿衛文庫は、伊丹にあった酒造業者・岡田家に伝わる資料に第二二代当主でもあり俳文学研究者であった岡田利兵衛の収集品を加えて成立した博物館である。江戸時代、岡田家をはじめ伊丹の酒造業者は大阪の漢学塾懷徳堂と交流があり、中井履軒や中井蕉園などが度々伊丹を訪れていたことが確認できる^{〔注〕}。現在の柿衛文庫のコレクションにもあるいは彼らの交流に由来する作品も含まれるかもしれない。

さて、本稿では、その柿衛文庫が有する懷徳堂関係絵画の画賛を紹介したい。いずれも^{（しんかんげつ）}部関月の画であり、

中井竹山の賛がある「牧童図」「清平図」「秋海棠図」、竹山の息子・中井蕉園の賛がある「酒泉図」の四作品である。二〇一九年二月、筆者は各作品を実見すべく柿衛文庫を訪れたが、あいにく作品の所在は不明であり、白黒のマイクロフィルムしか見ることができなかった。特に着色があるはずの「秋海棠図」を見られなかったのは残念であった。

東洋の文人画には、「詩中に画有り、画中に詩有り」（もと蘇東坡が王維の作品を評したことば）ということばがあるように、詩と画とが不可分であった。中井竹山の詩文集『奠陰集』、弟の履軒の詩文集『履軒古風』『履軒弊帚』、文集蕉園の詩文集『^{（げん）}壠集』（以下、『壠集』と表記）を見ても、懷徳堂の学者も多くの画賛を

作っていたことが確認できる。そして、その賛が着けられた画が何点も研究機関や博物館、美術館に保存されている（個人蔵でもある）。

これらの画の研究はこれまで美術の視点に偏り、画賛についての分析が不十分であった。翻字が誤っている場合も少なくなく、解釈も十分に述べられていない場合が多い。そこで、本稿を手始めに、それらの画賛を順番に紹介していきたいと考えている。

本稿で扱うのは以下の画である。（一）内は詩文集に見える名称。

中井竹山賛「牧童図」（牧牛図）

中井竹山賛「清平図」（李謫仙図）*李白を描く。

中井竹山賛「秋海棠図」（着色秋海棠）

中井蕉園賛「酒泉図」（汝陽図）*酒豪の郡王李璣を描く。

〔凡例〕各画について以下のような順序で述べた。

・画は、柿衛文庫蔵のマイクロフィルムのものである（旧蔵品）。

・【画像】で当該画の画像が見られる出版物を記した。

・わかりやすさを考え、まず原文の【賛および落款】を、次に【賛の大意】を述べた。

・賛については、賛が見える詩文集を紹介し、語句の違いなどを紹介した（語釈は最低限に留めた）。

・印も重要な要素であり、作品の真贋にも関わるため、その印文を紹介した。

*画の落款印はすべて朱文鼎印「関月」である。（別に検証を要する。）

本文

● 葩関月画、中井竹山賛「牧童図」（牧牛図）

【画像】高松良幸「葩関月の画業」九九頁

【賛および落款】

春煙淡々緑楊坡、得意帰牛飽軟莎、
荷鞭牧豎閑何甚、似唱当年白石歌。

辛丑之秋 竹山題 印「常世郷侯」「積善」

【賛の大意】

春霞にけむる緑に芽吹いた柳の堤を、柔らかい草で腹を満たした牛が満足げに帰る。

鞭を持つ牧童も暇を持て余し、古代の仙人の歌でも歌う

かのようなだ。

この賛は、『奠陰集（詩集）』巻六（影印本三六〇頁、活字本巻四26b）に見え、「題牧牛図 柳体」と題されている。天明元年（一七八一）の作である。画の落款の「辛丑」も同年である。

牧童は、画の題材としても好まれるいわゆる「画題」（お決まりのテーマ）であり、竹山もこの賛以外に三つの賛を残している（注2）。

柳体は高松良幸「葦関月の画業」は「柳が描かれていること」というが、楷書で有名な唐の書家・柳公権の書

体のことではないか（注3）。

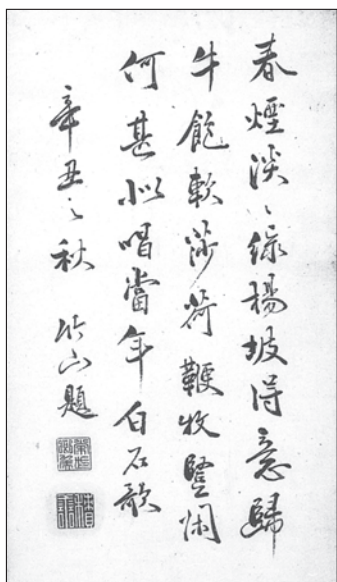
「白石歌」の白石とは、彭祖の時代にすでに二千年生きていたという伝説の仙人である。仙薬を得るために、豚や羊を飼っていたという（晋・葛洪『神仙伝』巻一）。これも「画題」として頻繁に描かれた（斎藤隆三『画題辞典』、金井紫雲『東洋画題綜覧』参照）。

落款印は、朱文方印「常世郷侯」も白文方印「積善」もともに「懷徳堂印存」に見える（前者は前川虚舟刻、後者は源重教刻）。「常世郷侯」は、海の彼方にあるとされた不老不死の国・常世の里の役人という意味である。

図1 「牧童図」（牧牛図）画



図2 「牧童図」（帰牛図）賛



● 部関月画、中井竹山賛「清平図」(李謫仙図)

【画像】 高松良幸「部関月の画業」一〇一頁

【賛および落款】

引首印「謝朝華啓夕秀」

詩酒唐家第一豪、清平三首調尤高、

長安市上昏昏醉、博得明皇宮錦袍。

竹山居士 印「積善」「子慶甫」

【賛の大意】

唐では詩でも酒でも第一で、「清平調三首」は特に出色だ。

長安の道端で酔っぱらって眠りこけながら、皇帝から錦の衣を賜った。

この賛は、『奠陰集(詩集)』巻七(影印本三八五頁、活字本巻四39b)に見え、「分飲中八仙 題李謫仙図 応尾藤子需也」と題されている。寛政四年(一七九二)、江戸滞在中の作である。大阪で親交があった幕府儒官・尾藤二洲の求めに応じて、「飲中八仙歌」の韻を使い詩を作成しあったものだという。

図3 「清平図」(李謫仙図) 画

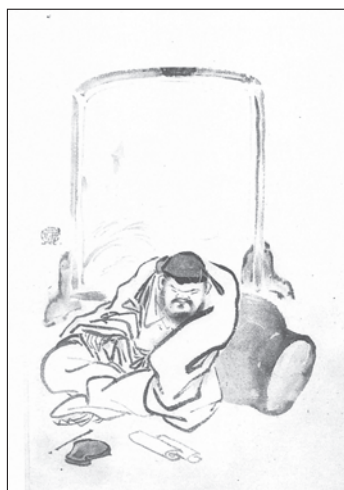
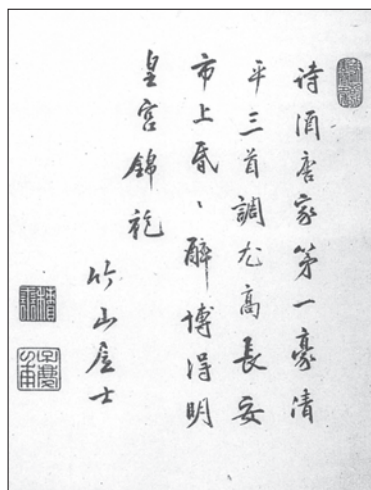


図4 「清平図」(李謫仙図) 賛



李謫仙とは李白のこと。杜甫に「飲中八仙歌」という詩があり、八人の酒豪の詩人を歌っており、その中に李白も登場する。

「李白一斗詩百篇、長安市上酒家眠、天子呼來不上船、自称臣是酒中仙。」

（李白は一斗の酒を飲み詩を百篇作った、長安の街中の酒家に眠り、天子がお呼びになっても船に乗らず、私は酒中の仙人ですとうそぶいた。）

「清平調三首」は二日酔いの李白が、玄宗皇帝に呼び出され、楊貴妃と花の美しさを瞬く間に詠み上げたといえらるる作品である（図5参照）。

「雲想衣裳花想容、春風拂檻露華濃。若非群玉山頭見、會向瑤台月下逢。…」

（雲には「楊貴妃の」衣装を想起し、花にはその容貌を想う。春風が欄干に吹き露が敷き詰めている。もし仙山の群玉山で会うのであれば、きっと仙人のいる瑤台の月下で会うだろう。…）

次に印について述べたい。

まず、引首印（賛の前に置く印、別名閑防印）「謝朝華啓夕秀」は、『懷德堂印存』にある。印文は、陸機「文賦」（『文選』卷十七所収）の「謝朝華於已披、啓夕

図5 『唐詩選画本』に見える玄宗と楊貴妃
*「七言絶句」（寛政二年（二七九〇）刊）卷一
「清平調詞三首」の挿絵（芙蓉画）



秀於未振（既に開いた朝の花（使い古された表現）は捨て、まだ開いていない夕方の花を咲かせる）」に基づく。この語は、懷德堂の講堂北側の窓に掛けられていた聯にも使われていた。

落款印は、白文方印「積善」も朱文方印「子慶甫」もともに『懷德堂印存』にある。積善は竹山の名、子慶は竹山の字である（甫は男子の尊称Ⅱ父）。

● 部関月画、中井竹山賛「秋海棠図」(着色秋海棠)

【画像】 高松良幸「部関月の画業」一〇一頁

【賛および落款】

引首印「間中今古」

馬嵬煙雨海棠魂、飛入秋陰幽草園、
伝神今有趙昌筆、想見蓬萊仙袂飄。

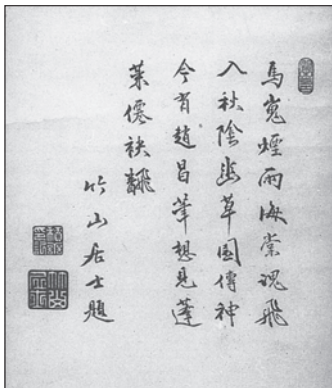
竹山居士題 印「積善印記」「竹山居士」

【賛の大意】

図6 「秋海棠図」(着色秋海棠 画)



図7 「秋海棠図」(着色秋海棠 賛)



馬嵬の霧雨に楊貴妃の魂を宿して咲く海棠の花が、秋曇りの草深い庭に飛び込んできた。

その様子を伝えるのに今は趙昌の画があり、蓬萊宮で仙女(楊貴妃)の袂が翻る様子を髣髴とさせてくれる。

この賛は、『笈陰集(詩集)』卷三(影印本三二六頁、活字本巻四5aなし)に見え、「題着色秋海棠」と題された詩の「推敲二首」の一である(註4)。明和六年(一七六九)の作である。題に「着色」と入っているのに、実見時に白黒のマイクروفイルムしか見られなかったのは残念である。

この賛は、秋海棠が唐の楊貴妃に譬えられたことに基づく^{注5}。玄宗皇帝は楊貴妃を寵愛し、「解語花」（人の言葉を解する花）と呼んだ。ただ、その楊貴妃は馬嵬で殺害されたため、秋海棠を詠む場合には美しさ以外に哀しさが表現された。控えめに咲く秋海棠の様子とその咲く季節が人の哀愁をそそるためであろう。いわゆる余韻に富む画題であったと言える。

趙昌の画がすばらしかったことは、蘇東坡の詩「書鄴陵王主簿所画折枝二首」に見える（「詩画本一律、天工与清新。边鸾雀写生、赵昌花传神。」。「蓬萊宮で仙女の袂が翻る」とは、有名な白居易「長恨歌」の「風吹仙袂飄々拳」「蓬萊宮中日月長」という部分に基づく（以上、ともに竹山が自ら割注で説明している）。

ちなみに、竹山の子蕉園も秋海棠を詠っている。中井蕉園『塤集^{けん}』所収の「秋海棠」であり、寛政九年（一九七九）の作である。

「均是海棠名、何独背春风、顰眉如有恨、秋深长信宮。」（ともに海棠の名を持ちながら、どうしてひとり春風に背くのか。眉を顰めて恨みあるが如く、長信宮に秋は深まる。）

長信宮は后妃の居所。寵愛を失った后妃の哀しみを表すために、詩でしばしば取り上げられた^{注6}。

印について述べる。引首印「問中今古」は『懷徳堂印存』に見える。「問中今古」は、朱子が宋学の先賢の人である邵雍（康節）を称えて作った詩の中に見える（ただし「問」は「閑」。閑な時でも歴史に思いを致すこと。続きは「醉裏乾坤」（酔っている中でも天地に思いを致す）。落款印の白文方印「積善印記」は、前川虚舟刻の木印で、白文方印「竹山居士」は石田刻で、ともに『懷徳堂印存』に見える。

● 部関月画、中井蕉園賛「酒泉図」（汝陽図）

【画像】『懷徳堂—近世大阪の学校』四二頁、高松良幸「部関月の画業」一〇〇頁

【賛および落款】

飲三斗之多也而猶流涎于麴車矣、酒泉名而已而猶願移封于彼矣、可謂嗜好之極矣。嗟夫、嗜学者如汝陽之於酒、既破千卷而猶流涎于惠車、二酉之誕猶欲實身其間、則胡患乎業之不就哉。

甲寅初夏

僊坡処士題 印「曾弘之印」□□□□□□

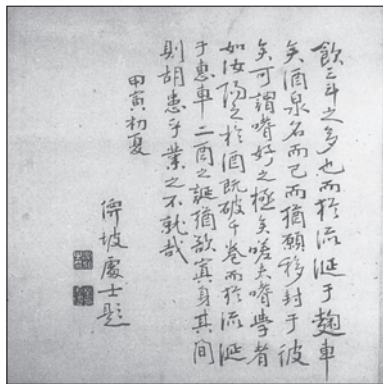
【賛の大意】

三斗の酒を飲み干してもまだ麴の車の前で涎を流し、地名に酒の字があるだけなのに酒泉に赴任したいと思うのは、嗜好の極致だと言えよう。ああ、学問を好むことが、この酒好きなお恵施郡王李璣のように、千巻の書物を読破した後でもなお恵施の蔵書に垂涎し、大西・小西の膨大な蔵書のでたらめな伝説の中にもなお身を置きたいと願うようであれば、どうして学業が成就しないことがあるうか。

図8 「酒泉図」(汝陽図) 画



図9 「酒泉図」(汝陽図) 賛



賛の作者・蕉園（一七六七〜一八〇三）は中井竹山の息子である。名は曾弘、字は伯毅、通称は淵蔵、号は蕉園・仙坡（船場にちなむ）。詩才に富み、将来を期待されたが、三十七歳の若さで亡くなった。

この賛は、蕉園の文集『墳集』に見え、「題汝陽図」と題されている（注1）。『墳集』は、外孫の並河寒泉が編輯した。「壘（墳）」は土笛、「簾」は竹笛で、「壘（墳）簾相和す」で兄弟の仲がよいこと。寒泉は、蕉園・碩果兄弟を偲んで、兄蕉園の詩文集を『壘（墳）集』、弟碩果の詩文集を『簾集』と名づけた。

落款に見える「甲寅」は寛政六年（一七九四）である。

この賛は、「清平図」と同じく杜甫「飲中八仙歌」に基づく。「飲中八仙歌」では、汝陽郡王李璣が「汝陽三斗始朝天、道逢麴車口流涎、恨不移封向酒泉（汝陽は三斗にして始めて天に朝し、道に麴車に逢へば口に涎を流し、恨むらくは封を移して酒泉に向かはざることを）」と詠まれている。

「恵車」とは莊子の論敵として知られた恵施が五車分の蔵書を持っていたこと。

『莊子』に見える。「二酉」とは、大酉・小酉の二山で、その洞穴に古書が千卷あったとされる。『郡国志』などに見える。すなわち、恵車、二酉ともに蔵書の多いことを言う。

この賛と『損集』の賛を比べると、賛の「之誕」が『損集』では「誕而已」になっているというわずかな違いがある。いずれにせよ文意に違いは生じないが、蕉園の文章に対するこだわりを垣間見ることができると思うのでいささか説明したい。

『損集』では「誕而已」となっており、その後に句点が見える。もとは「恵施・二酉に垂涎し、でたために過ぎないのでその中に身を置きたいと欲する…」と書かれていたのである。この画賛のように「之誕」であつても以上の句読で読めるが、字の間隔および蕉園がわざわざ

ざ変えた意図を推測して私は上記【賛の大意】のように解釈した。

落款印は、白文方印「曾弘之印」と白文方印「□□□□（*須隠?）」である。大阪大学懷徳堂文庫には、蕉園の印も残されている（『懷徳堂印存』所収）。後者は「蕉園16」という番号の印（二・〇×二・〇cm）である（図10）。

おわりに

本稿では、柿衛文庫所蔵の四点の懷徳堂ゆかりの絵画を画賛を中心に紹介した。画賛を有する懷徳堂ゆかりの画は、その他、大阪大学懷徳堂文庫、大阪歴史博物館などに多数存在する。これらの画賛については、真偽問題も含め、今後紹介していきたい。

注

（1） 中井蕉園『損集』などを参照。

（2） 以下の三首が確認できる。

「題画牛（*「題放牛図」を見せ消ちして直す）」「馴牛閑有餘、慕草久踟躇、不知芻牧者、何処夢衆魚*。」（『寛陰集（詩集）』）



図10 蕉園印（番号16）

卷六（影印本三六八頁、活字本卷三16a）（一七八四年作？）

*吉夢。「詩経」小雅・祈父之什「無羊」に「牧人乃夢、衆維魚矣、旒維旗矣。大人占之、衆維魚矣、實維豐年。」と見える。

「牧牛図」「柳臨野水綠婆娑、得意犇牛涉淺波、牧童坐背閑殊甚、好唱當年白石歌。」（『奠陰集（詩集）』卷七（影印本三七四頁）（一七八五年作？））

「題牧童図」「占得清閑趣、林垌一牧童、市朝塵土吹將尽、牛背斜陽短笛風。」（『奠陰集（詩集）』卷七（影印本三九三頁、活字本卷四58b）（一七九六年作？））

(3) 懷德堂の書道については、福田哲之「懷德堂における唐様書道の特色——中井竹山の書論を中心に」（『懷德』七五号、二〇〇七年）を参照されたい。竹山が「答貞藏論字学」（『竹山先生国字牘』所収）で柳公権の楷書を評価することを述べる。

(4) 原文の様子。内容は各首大同小異。

「馬嵬埋没海棠魂（魂？）、化作秋園幽草苗、趙筆伝神色堪摘、蓬萊仙袂坐間飄。」

「割注」「趙昌善画花、東坡詩「趙昌花伝神」。長恨歌「風吹仙

袂飄々拳」、又「蓬萊宮中日月長」。

推敲二首

「（本文に引用の詩）」

「点化海棠枝上霞、秋園露泣（泣？）断腸花、玉容寂寞楊妃恨、今日伝神属趙家。」

「割注」「秋海棠、一名断腸花。長恨歌「玉容寂寞淚闌干」。

(5) 宋・釈惠洪「冷齋夜話」卷一「詩本出処」所引「太真外伝」「上皇登沈香亭、詔太真妃子。妃子于時卯醉未醒、命力士侍待兒扶掖而至。妃子醉顏殘粧、鬢亂釵橫、不能再拜。上皇笑曰、「是豈妃子醉、真海棠睡未足耳。」」（『冷齋夜話・梁溪漫志』上海古籍出版社〈歷代筆記小説大観〉、二〇一二年、一〇頁。）

また、蘇東坡「海棠詩」に「只恐夜深花睡去、更燒銀燭照紅粧。」（『更燒』は「高燒」「故燒」に作るテキストあり）とある。

(6) 李白に「長信宮」詩があり、「月皎昭陽殿、霜清長信宮。天行乘玉輦、飛燕与君同。別有歡娛處、承恩樂未窮。誰憐团扇妾、独坐怨秋風。」と詠う。また、王昌齡に「長信秋詞」（班婕妤に借りて、失寵の怨みを詠った歌）があり、第一首に「金井梧桐秋葉黃、珠簾不捲夜來霜。熏籠玉枕無顏色、臥聽南宮清漏長。」と詠う。また、崔国輔に「長信草」があり、「長信宮中草、年々愁処生、時侵珠履跡、不使玉階行。」と詠う。

(7) 『墳集』三本（参考文献参照）の内、吉田銳雄輯「蕉園先生文集」（卷二）は、「車」を「章」に誤る。

参考文献

『懷德堂——近世大阪の学校』（大阪市立博物館、一九八六年）

* 四十二頁に「酒泉図」の画像あり。

高松良幸「蒔閑月の画業―懷徳堂との交流を中心に」(『フィロクリア』十一号、大阪大学文学部美学科、一九九四年)

* 「牧童図」「清平図」「酒泉図」「秋海棠図」の画像あり。

高松良幸「中井竹山をとりまく画家たち―『奠陰集』所収の画賛を中心に」(『近世大坂画壇の調査研究』(大阪市立博物館、一九九八年))

『懷徳堂印存』(懷徳堂記念会、一九三三年実印版、一九三九年刊本)

* 中井竹山や履軒らの印影(竹山…八十四顆、履軒…五十四顆)を収める印譜。

湯浅邦弘「中井竹山の印章」(『懷徳堂センター報 2007』、二〇〇七年)

* 竹山の印の印文の一覧およびその解説がある。(同誌2008年には履軒印あり。)

中井竹山『奠陰集』(手稿本)(大阪大学懷徳堂文庫蔵)

* 影印が水田紀久編『近世儒家文集集成』第八卷(ぺりかん社、一九八七年)にある。

* 活字本は、懷徳堂記念会編『奠陰集』(松村文海堂『懷徳堂遺書』内、一九一一年)がある。

中井蕉園『蕉(塙)集』(並河寒泉輯)(大阪大学懷徳堂文庫蔵、I21.44/TEN)

* 他、大阪府立中之島図書館本(全六冊。文集三冊、詩集三冊)233.118、吉田鋭雄輯『蕉園先生文集』(大阪大学懷

徳堂文庫蔵、919.5/北NAK)がある。

『唐詩選画本』(七言絶句)(寛政二年刊)

* 鳳文書館から一九八六年に復刻本が出されている。